

日本災害看護学会先遣隊 令和5年7月九州北部を中心とする豪雨被害活動報告

2023年7月15日(土)

活動隊員：寺田英子、三橋睦子

1. 活動日時

令和5年7月15日(金)7:00-16:00

2. 活動場所

久留米ふれあい農業公園（久留米社協によるボランティアセンター）、大橋校区コミュニティセンター

3. 被害状況

2023年7月15日17:00現在、総務省消防庁の情報更新なし

- ・人的被害：死者11名、行方不明3名、重傷4名、軽傷10名
- ・住宅被害：全壊15棟、半壊44棟、一部損壊148棟、床上浸水612棟、床下浸水1,481棟

総務省消防庁 令和5年6月29日からの大雨等による被害及び消防機関等の対応状況（第25報）

4. 天候

晴れ時々雨 最高気温32℃ 最低気温27℃ 湿度79%

5. 活動の実際

7:00 出発

久留米社協災害ボランティア担当者、田主丸中央病院副施設長等と本日の行動計画を連絡・調整。ボランティアセンターの開設場所である久留米ふれあい農業公園に向かう。

9:00 久留米ふれあい農業公園到着。ボランティアの送り出し、巡回同行、迎え入れを支援させていただくこととなった（写真1）。本日は休日ともあって個人参加や企業参加のボランティア約200名が集結した。数名～20名くらいのチームで要請のあった個人宅に車やバスで配置され活動した。各チームリーダーには休憩や熱中症予防、感染予防など体調管理に関するオリエンテーションが行われていた。巡回は社協職員に同行し、各所で冷たい飲料や塩飴などを配布し体調変化がないか声掛けを行った。同時に住人の方に生活の状況、体調についてなど確認した。住人の方々はボランティアの活動を大変喜ばれていた。中には被災してから10日間入浴できていない方もおられ、近隣の施設で浴室を地域住民に開放しているところがあることを紹介し、利用時間などを記載した紙を渡して入浴していただくことになった。本日は気温も湿度も高い中での作業となるためボランティアの健康管理に傾注したが、途中、強いにわか雨と突風が吹き悪天候となったため、ボランティア活動は正午で中止となった。帰ってきたボランティアに体調不良者はいなかった。

13:30 大橋校区コミュニティセンターに移動

14:00 大橋校区コミュニティセンター到着。周辺地域は道路に土砂が堆積しており、汚泥が放置された

ままの状況であった。ここは筑後川とその支流である巨瀬川とに挟まれた地域に立地し、毎年洪水に見舞われてるといふ。担当者によると「洪水には慣れているが、今回は大変な被害になった。行政などの対応が遅れていたが、本日になってやっと民間のボランティアや、普段当センターを利用している地域住民数名が片付けなどの支援に入ってくれている」とのことであった。館内は今だ汚泥にまみれており、職員が泥の撤去作業に追われていた。特にトイレは排水溝が泥でつまっており水で洗い流せない状況であった（写真2）。そのため適切な清掃の仕方を提案した。床は業者が清掃に入る予定となっていたが、それまでの床の清掃やその他の什器や物品の片付けが必要であるが、当センターの建物は久留米市の管轄であり、今後当センターの活用についても見通せない状況であった。当センターの利用者はセンターに信頼を置いており、私たちが訪問中も利用者から「畳の運び出しが重くて困っている。手伝いが欲しい」との電話が入ってきて、すぐに対応されていた。この地域における当センターの果たす役割は大きく、地域のニーズと支援をマッチングさせるコーディネーターとしての事務職員の存在は重要であり、センターの早期復旧が望まれる。

14:40 大川校区コミュニティセンターと同地域で浸水被害に遭った大橋保育園の視察を試みたが、コーディネートする方が許容範囲を超えており対応できないだろうとの情報を得たため、訪問を断念した。

15:00 北野地区視察（写真3）。

筑後川の周辺で浸水し、特に農作物に多大な被害があった地域である。見渡す限り農地は汚泥に埋め尽くされており、経済的損失は大きいことが推測された。

16:00 活動終了

6. 考察

被害の大きかった地域を中心に調査を行ったが、久留米市のほぼ全体が浸水しており、その被害の全容をつかむことは困難であった。ボランティアなどの支援をコーディネートする担当者からは「初めてのことで、どうしたらいいかわからない」との声も聞かれた。今回、久留米市では保健医療福祉調整本部を立ち上げない方向で対応している。被災者のいのちと生活を守るためには行政の支援や社協の支援、民間の支援のコーディネートが重要であるが、支援が遅れていたり行き届いていない地域もあるように見受けられた。

季節がら、体調管理にはいっそう注意が必要であるし、今後中長期的な復旧・復興のための支援が必要であろう。被災者やボランティアを含む支援者の健康管理、メンタルヘルスケア、独居高齢者など在宅で支援が必要な被災者にどのようにアプローチするのか、どうすれば健康を維持し災害関連死を防ぐことができるのか、地域に根差した包括的な対策が必要である。

7. 課題

- 1) 当事者および支援者が健康障害を来たさず休養が取れるような支援体制の構築
- 2) 被災地で暮らす独居高齢者などへの二次的健康障害を予防するための対策
- 3) 効果的な支援の配分のためのコーディネート

8. 参考写真



写真1



写真2



写真3